

## 案08『the 滑舌』written by 本多撰

＊落ち着いてはつきり読む。

＊できればテンション高めで。

＊早口言葉をつなげただけなので、内容は深く突っ込まないで。

A：上司。

B：部下。

A「(板付きで読書中) 疾風吹きすさぶ裾野の雪原を建設資材を積載した雪上車は静かに左折した——」

B「(勢いよく登場) シャー少佐！ シャー少佐！ シャー少佐！ 浅草署の捜査主任から至急の要請です！」

A「さあさあ、させさせ、ズンズンさせ、騒々しいぞ、図々しいぞ、シズシズさせ。例えるなら“お綾や、親にお謝り。お綾や、八百屋にお謝りとお言い”という塩梅だよ、君」

B「失礼致しました！ ……先月末の主要先進国首脳会議が開催された際の——」

A「老練な理論家たちが理路整然と論理的に議論し、与野党でようやく確約して開催された画期的な会議だったが」

B「はい、その年の七月に“信州信濃渋井村、新家の重さんの尻に虱が四匹しがらみのようにしがみついていたのが証拠になった、刺傷殺人“支離滅裂”失踪未遂事件”がありました」

A「ああ、あれか。確か事情聴取中に、自称処女膜再生手術室助手、飯島石七郎の言い分に嘘偽り、いんちき、苛立ち、言い逃れがあった件だな」

B「そうです！ 彼は裁判のとき“取り調べのとき、言い分があつて言おうにも威圧されて何も言えなかった”と言いやりました……。 (しみじみ) 私は、あの事件以来、“怪しやと、怪しむべきを、怪しまず、怪しからぬを、怪しむ怪し”というのが座右の銘になりました」

A「奴さん、確か前科に、“瓜売りが瓜売りに出て、瓜売れず、瓜売り残し、瓜売り売り帰る、瓜売りの声”を巧みに利用した、ウリウリ詐欺があったな。で、被害者の名前は——」

B「“寿限無寿限無ごこうのすりきり、海砂利水魚の水行末、雲来松風来松、食う寝る所に住む所、やぶら小路のぶら小路、パイポパイポのしゅうりん丸、しゅうりん丸のぐうりんだい、ぐうりんだいのぼんぼこぼーのぼんぼこなあの長久命の長助”さん(35)です」

A「え、そうだったか？ “原幌鰭平と原洞幌平じゃあなかったか？」

B「その二人は容疑者です。それでその事件を上(うへ)に報告する際に、七月末の就業者数と失業者数を参考資料として示唆したことが鑑(かんが)みられたようで、次回は、市制施工三十周年式典の一環として、猪食四食試食会の司会進行をしとのことです。なお“猪鍋、猪汁、猪シチュー、猪丼、以上、猪食四食、審査員試食済み。新案猪食七種中の四種を思案せよ”とのこと」

A「……東京都特別特許許可局、農務省特許局、日本銀行国庫局の許可は得たのだろうか？」

B「ただいま許可申請中です。現時点では、東京特許許可局、中小商工業振興会、昭和シェル石油の許可は得た模様です」

A「ご苦労なことだ……。しかし何の因果(いんが)なのだ。こんなに何度もこんな因果(いんが)な任務(にんむ)を担(にな)うとは！」

B「それは少佐が、社会情勢と周囲の諸情勢を参照し、終始、草案再審査の実際(じしつ)の衝(しやう)に専心せられた

わけですから」

A「なるほど——。そういうことなら腹を括ることとしよう。では——“秀才諸氏の意志を重視し、小生は誠心誠意<sup>ほんせいあん</sup>成案即日実施に賛成する”との返信電報を」

B「お引き受けになられるのですね！？ シャー少佐そうしやしょう！」

A「引きにきにくい引き際<sup>ぎわ</sup>にならんように最<sup>ひい</sup>真<sup>きめ</sup>目に引き受けたいものだ」

B「電報といえば、戦艦グラナダの艦長で、ナダダナ大隊隊長、ナダダナ・ナタデココ大尉より暗号電報が届いております。瀕死<sup>ひんし</sup>の使者が渋谷から日比谷へ必死<sup>しつそう</sup>に疾走して証言してくれました」

A「その使者は貨物船を利用したと見た。貨物船の旅客<sup>りょかく</sup>は貨物と一緒に旅客運賃が安いからな。よし、読み上げてくれ」

B「それでは読みます。——“戦艦名はグラナダだぞ。鵜<sup>う</sup>と鮎<sup>あゆ</sup>が追い合い、鮎が鵜を追いやる。我が名がナダダナ、ナダダナ、ナダダナなのだな”であらされます」

A「何！？ 解読すると——“海軍機関学校機械科、今学期学科科目、各教科教官協議の結果、下記の如く確定。科学、幾何学、機械学、国語、語学、絵画、国家学、撃剣”というわけか……。こいつはハードだ！ よりによってこんなご時世に……。こんなときには祈らずにはいられんよ……。数珠<sup>じゆず</sup>を取り出して」

B「その数珠<sup>じゆず</sup>は増上寺<sup>ぞうじょうじ</sup>の僧正<sup>そうじょう</sup>の数珠<sup>じゆず</sup>では！？」

A「いやこれは、書写山<sup>しよしやさん</sup>の沙狸<sup>しやしやうじやう</sup>々と称される、車掌も兼任、社僧<sup>しゃそう</sup>の総名代<sup>そうみょうだい</sup>、今日書写する奏者<sup>きやうしよしや</sup>の社僧正<sup>そうしや</sup>の数珠<sup>じゆず</sup>だ。（しみじみ）これを見ていると大師の言葉を思い出す——」

B「“虎を捕るなら、虎を捕るより鳥を捕り、鳥を<sup>おとり</sup>囿に虎を捕れ”ですね」

A「いや違う、それじゃあない。“南無釈迦<sup>なむしやか</sup>ぢや娑婆<sup>しやば</sup>ぢや地獄ぢや苦ぢや楽ぢやどぢやこうぢやと言うが愚ぢや”の方だ。無脈絡<sup>むみゃくらく</sup>に脈々と続く妙味のない経文、名聞、妙案よりぐっとくるものがある——ところで君、昨夜の“ジャズ歌手とシャンソン歌手総出演の新春シャンソンショー”はどうだった？ なかなか盛況だったらしいじゃあないか」

B「それはもう拍手喝采<sup>かっさい</sup>の大盛況！ しかし、個人的感想として、第五交響曲に観客驚愕したもの、母の頬に皮肉な微笑<sup>ほほえ</sup>みを見、抱負や批判を発するキッカケ聞く子が、ごく利かん気で、キッカケ聞く気か聞かん気か、書きかけ書こうか、駆けっこか、買い食いか、危険、危険、今日が期限だ、書きかけ書こうと、お小言<sup>こごと</sup>喰い喰いキッカケを聞く場面で、踊り踊るなら踊りの道理を習って踊りの道理通りに踊りを踊れ、と思いました」

A「歌劇家も過激な歌劇の稽古に感激するのもいいが、本番に果敢<sup>かかん</sup>に賭けに出ても苦境を克服する効果は勝ち得なかったわけだな？ 羊皮紙の表紙の批評集など好評披露しそうな批評家の、はきはきした批判がひしひしと伝わってきそうだな」

B「はい、まったくです。それでその帰途、長町<sup>ながまち</sup>の七曲がり長い七曲がり、曲がりいいなかなかの七曲がりの斜めを六曲がり曲がって三曲がり曲がった先の、神田鍛冶町<sup>かんだかじちやう</sup>の、角の乾物屋<sup>かどかんぶつや</sup>の勝ち栗買ったら、硬くて噛めず、返しに行ったら、勘兵衛<sup>かんべえ</sup>のかみさんが帰ってきて、癩癩<sup>かんしゃく</sup>起こして、カリカリ噛んだら、カリカリ噛めました」

A「(笑って) ははははは。あそこのは、頑<sup>かたく</sup>々な肩叩き機のように歯が立たない硬さだからな。その上に、とろろ芋のとろっとするととろろ汁をかけると、とろとろにとろけるんだがね」

B「え、そうなんですか？ まさに寝耳に水<sup>みょうぎ</sup>の妙技！ 今度やってみます。——それから一緒にいた連れ合いが向かいの店を目敏<sup>めびと</sup>く見付けて“あのアイヌの女の縫う布は何、あの布は名の無い布なの？”と尋ねました」

A「ひょっとして、その店の<sup>ながもち</sup>長持の上に、生米、生麦、生卵、なた豆<sup>なな</sup>七粒生米<sup>なな</sup>七粒、七粒<sup>なな</sup>なた豆、七粒生米、京の生<sup>だら</sup>鰯<sup>がつか</sup>奈良生<sup>なな</sup>まな鰯、がなかったか？」

B「いえ、ありません。<sup>くぐ</sup>潜りつけりゃ<sup>くぐ</sup>潜りいい栗の木の<sup>くぐ</sup>潜り戸、<sup>くぐ</sup>潜りつけなけりゃ<sup>くぐ</sup>潜りにくい栗の木の<sup>くぐ</sup>潜り戸の先に、狸百匹箸百膳天目百杯棒八百本、武具馬具<sup>くぐ</sup>武具馬具三武具馬具合わせて武具馬具六武具馬具、<sup>つづみ</sup>鼓と<sup>こづみ</sup>小鼓を包む小包<sup>こづみ</sup>が積んであり、バナナなどの<sup>くだもの</sup>果物は棚などに載せてあるだけです」

A「そうか、なら勘違いか。しかしそのように質素なのも、<sup>やし</sup>椰子の実を<sup>ひ</sup>狒々が<sup>ひ</sup>食ひ<sup>ひし</sup>菱の実を獅子が食う程の不況で、必要不可欠な被服費や必需品が不足してるからな、無理もない。桃の産地の<sup>み</sup>見目麗しい<sup>め</sup>桃娘が、“皆々様の<sup>みまへ</sup>見ている御前で右の耳から耳輪を三つ見事に取り出してみせます”と<sup>たんか</sup>啖呵を切りつつ、見るも<sup>みじ</sup>惨めに、道行く人に桃を売り歩かなくては生きていけない時代だ」

B「“今日興じる京で、不況で狂じる”というところですよ。——で、ところがそれを、よく分からないのでよくよく見ると、それは<sup>ししゅう</sup>刺繍ではなく、“スモモも桃も桃の内”といわんばかりの、本物の桃そのものでした。ついでだから食べていこうということになり、“梅の実も桃の実もみな美味い。ママの見舞いに美味い桃の実もう三つ”という具合に、見事に店の桃をみんな食べてしまいました」

A「ほう！ 正直うらやましいよ。私もいい加減、休暇をもらって、<sup>せんそうじ</sup>浅草寺の<sup>せんじゆかんのん</sup>千手観音<sup>せんねんせんじつ</sup>専念<sup>せんべん</sup>千日千遍<sup>せんべん</sup>拝んで<sup>せんぞくちやう</sup>千束町で<sup>せんべい</sup>煎餅買って千食べたいところだよ……。ところで、明日の朝はあすの朝ともあしたの朝とも読めるが、<sup>あした</sup>明日の私の予定は？」

B「午前に、伝染病予防病院伝染病予防病棟の新設診察室視察。午後に、自宅療養中の理論派料理評論家肌の東北特派員と会談。以上です」

A「(落ち込んで) はあ、相変わらず過密スケジュールだな……。 “今今と、今という間に、今ぞなく、今という間に、今ぞなくなる” か……」

B「何を弱気なことを！ “<sup>とど</sup>止まらば、<sup>とど</sup>止めてましを、<sup>とど</sup>止めても、<sup>とど</sup>止まらぬ年を、いかに<sup>とど</sup>止めん”ですよ！」

A「(気を取り直して) そうだな。 “成せば成り、成さねば成らず、成るものを、成らぬは人の、成さぬなりけり” だもんな。さあて、今日も一所懸命に一生懸命、不眠不休で<sup>ふんこつさいしん</sup>粉骨砕身、<sup>いっしんふらん</sup>一心不乱に<sup>いちいせんしん</sup>一意専心、<sup>じゆんしん</sup>純真無垢に<sup>むく</sup>誠心誠意、働くか！」

B「そうしやしょう、シャー少佐！ そうしやしょう！」

(了)